

琉球唐栄久米村の景観とその構造

高 橋 誠 一

— 目 次 —

- 1 はじめに
- 2 現在的那覇市久米
 - (1) 久米の景観の変容
 - (2) 久米の地形と現景観
- 3 唐栄久米村の景観復原
 - (1) 昭和初期の久米とその周辺の道路
 - (2) 昭和初期の久米とその周辺の景観
 - (3) 唐栄久米村とその周辺の景観
- 4 唐栄久米村の景観とその構造
 - (1) 絵画・絵図史料との比較検討
 - (2) 唐栄久米村における風水思想
 - (3) 面積から見た屋敷地
- 5 むすびにかえて……唐栄久米村の景観とその基本理念

1 はじめに

筆者は、先に首里城下町について、「首里古地図」に記載されている景観を現在の1:2500都市計画図上に復原することによって、その都市プランに風水思想や四神の影響が色濃く反映していること、また多核的都市プランすなわち円形や方形の街区・道路が認められること、そしてそれは琉球独自のものであると同時に中国の影響をも受けている可能性の高いことなどを論じた¹⁾。

また、引き続き地形や諸景観要素から検討した結果、都市計画の実態やその基本理念についてのいくつかの仮説を提示した。まず首里城と首里城下町の立地に関しては、首里城と屋敷地の空白地である小高い石灰岩堤、大部分が緩傾斜面である中位段丘上位面の屋敷地、急傾斜地である小起伏丘陵谷壁斜面に建設された屋敷地という図式が成立すると思われる。さらに首里城下町に見られる地割の形態は、円形もしくは楕円形の屋敷地の地区、楕円形ではあるが全体が屋敷地ではなく首里城下町の縁辺部でその内部に水田や林を含んでいる地区、方形の地区

の三種類に分類できるが、これらのうちで、円形（楕円形）のほとんどは、地形的条件によって生じたものと考えられ、各々の多核的プランの主たる成因は地形的単元に帰してよい。しかし、中位段丘上位面においては、円形・方形のいずれを造ることも可能であったことを考慮すれば、全体としては円形を志向するという原理が存在した可能性が強い。そしてこの円形志向には、中国の影響や風水思想を想定できるのではないか。直進するといわれる悪霊（邪気）を排除する目的や良い「気」の流出を防止するという目的にとっては、円形の方が方形よりも適切であったし、それゆえ首里城下町において長距離を見通し得る街路がほとんど存在しないという事実は、幕藩体制下の城下町における軍事的目的による「遠見遮断」とは、異なったものであった。

すなわち首里城下町の建設に当たっては、中国から伝来した地理思想の影響がきわめて濃厚に見られるわけで、四神が意識されていたことも確実であろう。筆者は一応、玄武=弁ヶ嶽、朱雀=波上宮、白虎=末吉宮の一带、青龍=高津嘉山であると想定しているが、琉球の人達にとっての四神と中国からの冊封使にとっての四神の相違、あるいは時代による四神の方角の変遷、さらには重複して認識されるというような重層的構造も想定できるかもしれない。ただこの場合も、四神はあくまでも風水理論の枠があってこそのものであったと考えるべきであろう。とりわけ、首里城下町の諸景観要素のうち、特に林に関しては、積極的な意味が内包されていると考えられる。要するに、いわば首里城下町の中心地域とでも表現できる地区は、林によって囲まれており、「御殿」と「按司」という最高位の屋敷は、ほぼこの地区に限定されている。このことは首里城下町における階層制を想起させるものであると同時に、最も守るべき地区を植林事業という人工的手段によって取り囲むという風水理論にも整合するものであった。さらにまた、人工的構築物ではなく、あくまでも所与の自然的なものではあるが、首里城下町を取り巻くほぼ二重の急傾斜地の帯の存在も、外青龍、外白虎、外水口に口を開ける山並み、内側の内青龍、内白虎、内水口に開放する山並みの二重の山並みという理想的風水の地勢に見事に整合していると解釈できることを論じたわけである。²⁾

いずれにしても、琉球王朝時代に建設された首里城下町が、琉球独自の地理観に加えて、中国からの地理観を受容していたことは疑問の余地がない。そしてその受容には、中国からの渡来者によって形成された唐栄（唐営）久米村の住民が、大きな役割を果たしたことは確実であろう。唐栄久米村は、琉球における学問・芸術・技術などの発信基地であり続けた。とすれば、唐栄と称された久米村には、いわば中国本来の地理観が具現化していた可能性が高い。このことを検討することによって、琉球における地理観の形成も浮かび上がってくるであろう。また両者の共通点と相違点を追及することによって、日本をも含めた東アジア世界の地理観の実態

にも迫りうるのではないか。

2 現在の那覇市久米

(1) 久米の景観の変容

久米村はかつての那覇の中心部の一角を占める地区である。以下、嘉手納宗徳氏によって、その変遷の概要をたどっておきたい。那覇は、かつては海上に浮かぶ島嶼群から成っていて「浮島」と呼ばれていた。上之蔵から辻、済広寺から波之上、上の毛、若狭町村・久茂地村・久米村に囲まれた一帯から内金宮に至る一帯が、ここでいう「浮島」の部分であった。またその外側を囲む東村・西村・若狭村などは以前は海であったが、砂礫の堆積作用によって連結された地区というように考えられている。那覇が開港場となったのは15世紀とされるが、1450年ごろの「琉球国図」（『海東諸国記』）には那覇港が「江南南蛮日本商舶所」と記されていて、その繁栄ぶりがわかる。この図には宝倉（御物城）、国庫（親見世）、石橋（長虹堤）のほか、九面里すなわちクニンダ（久米村）も記されている。さらに10年後の「朝鮮人漂流談」によれば、天使館、市場、天妃宮などもすでに存在していたことが明らかである。

この地域の整備と発展は、その後も引き続いて行われた。迎恩亭や唐船小堀も1534年の『陳侃使録』に記載されているし、天尊廟、龍王殿、美栄橋、崇元寺橋、イベガマ、長寿寺、聖現寺も第一尚氏のころにすでに完成していた。また第二尚氏の尚真王の末年（1526年ごろ）には崇元寺、尚清王時代（1527～1555年）には屋良座城、三重城、護国寺、地藏堂、夷堂、尚寧王時代（1589～1620年）には袋中上人ゆかりの桂林寺も建設されていた。

薩摩侵略によって在番奉行所などの薩摩関係の役所が作られるが、17世紀以後も、この地域には、多くの施設が建設されていく。尚質王時代（1648～1668年）には辻と仲島に遊郭、尚貞王時代（1669～1709年）には孔子廟、尚敬王時代（1713～1751年）には明倫堂が孔子廟敷地内に設置された。

ところが明治以降、久米とその周辺は急速な変貌をとげるにいたった。明治年間には「西の海」が埋め立てられ、明治から大正にかけて東町の海岸部や泉崎の海岸部も埋め立てられ、かつて海中の小岩島であった「仲毛」は陸化、仲島の大石も陸封されてしまった。さらにその東南辺も埋め立てによって那覇駅ができて旭町が形成された。しかしこれらの変貌にもかかわらず、史跡・名勝はほとんど原形をとどめていたが、1944（昭和19）年10月10日の空襲と1945（昭和20）年3月23日から始まった沖縄戦によって、ほとんどが灰燼に帰した。ただこの時点では、以前の道路や街区は、かろうじてその痕跡をとどめてはいたが、1952（昭和27）年から始まった那覇市区画整理事業によって、完全に抹消されてしまった。「上の毛」や「雪崎」

は削り取られ、辻原や上之蔵も削平されてしまったし、三重城から波之上までの海岸や旧雪崎から泊港南の兼久の浜に至る一帯も埋め立てられて、「潮の崎」,「灰焼屋」,「アカチラ」も姿を消し、夫婦岩も陸地になってしまった。御物城から南明治橋、落手下からガーナー森付近も陸地になってしまって、国場川河口部や海岸線も完全に作りかえられてしまったのである。「このように史跡も名勝もまったく無視した街づくりは、他に類例を見ないものではなかろうか。かかる状態から歴史の跡を訪ねるのは至難のわざとなった。」と嘉手納宗徳氏は嘆く³⁾。

もっとも唐栄久米村のかつての景観を復原するための史料が皆無であるというわけではない。後述するような各種の地図や絵図もあるし、また絵画も有効な史料ではある。例えば南出真助氏は19世紀作成と推定される『琉球貿易図屏風』(滋賀大学経済学部附属資料館蔵)によって那覇港の景観、また伊地知貞馨氏「那覇及び久米村図」(『沖繩志』,1877年所収付図,沖縄県立図書館蔵)によって久米村とその周辺の景観を検討している。それによれば、南の入江を取り巻く施設配置は、過剰なまでに「異国人」を意識しているように思われるとする。入江の両側に長大な石積みの防波堤が海中に突き出しているが、これらは水路の両側に広がる珊瑚礁の浅瀬を縁取る格好になっており、延長500mを超える北堤の途中に「沖之寺(臨海寺)」,「仲三重城」,終端には「三重城」が築かれていて、入港船舶を監視する望楼の役割を兼ねていた。また南堤の終端は「屋良座森城」であった。この入江に侵入してきた冊封使の船は繫留スペースの「唐船小堀」に寄せられ、「通堂」という埠頭から上陸し、「迎恩亭」で休憩した。さらに陸地を進めば「市場」,那覇の行政を司る「親見世」,特産輸出品の管理にあたる「砂糖座」,宿泊滞在施設の「天使館」が並んでいて、近代的な国際貿易港にも通じる空間構成を持っていた。天使館の背後には、海上安全を司る中国媽祖信仰である「上天妃宮」「下天妃宮」が配され、「孔廟」も置かれるなど、周囲は中国的な空気に満たされていた。つまり、久茂地川によって出島的に孤立したこの空間は、琉球と中国とが入り交じった、政治的文化的緩衝地帯として作用していたとするのである。しかし、これらの歴史的景観や雰囲気は、もはや存在しない。⁴⁾

(2) 久米の地形と現景観

久米は、琉球王朝時代から明治29年まで久米村として存在していた。ただし行政的には多少の変化もあった。はじめは島尻方真和志間切那覇町に含まれていたが、総理唐栄司が置かれて独立したとされる。『高究帳』には真和志間切那覇町のうち久米村町として記載され、『中山伝信録』では東門・西門・北門・南門(大門)の4村に分けられている。その後、1667年には東に普門寺村が成立し1735年に久茂地村と改称され久米村に属するようになるなどの変遷を経た。1880(明治13)年の時点では戸数1510,人口6038であったとされる。明治29年には那覇区の

字名として久米の名称が使用されるようになったが、明治 36 年の戸数は 738、人口 3323 であった。ところが、大正 3 年には久米町 1 丁目・2 丁目と天妃町 1 丁目・2 丁目に分割された結果、久米の地名はかつての久米村の一部に縮小されることとなった。さらに昭和 46 年には戦災復興区画整理事業が完了して行政区画の変更が行われた。現在の久米 1 丁目・2 丁目は久米の名称を残すものの、1 丁目が辻町 1 丁目・天妃町 1 丁目と 2 丁目・上之蔵 1 丁目と 2 丁目・松山町 1 丁目の各一部、2 丁目が久米町 1 丁目と 2 丁目・松山町 1 丁目・松下町 1 丁目の各一部から成っている。したがって現在の久米の地名はあくまでも新生の町名であり、琉球王朝時代の唐栄久米村の範囲とは大幅に異なったものとなっている。それ故、かつての唐栄久米村の範囲は、大正 3 年から昭和 46 年の間の久米町 1 丁目・2 丁目と天妃町 1 丁目・2 丁目⁵⁾に、後述する東部及び北東部に広がっていた地を加えたものであった。

このように久米村はその範囲においてさえ大きな変更を加えられてきたわけであるが、景観的にはより決定的な改変を余儀なくされてきた。それは歴史的景観のいわば抹消であったと表現しても過言ではない。

写真 1 は、久茂地川に架かった現泉崎橋を西に渡ったところにあるロータリーの写真で、戦災復興区画整理事業に際して意識されたのか否かは不明であるが、かつての久米大門の位置にほぼ当たる。写真の右を上方に伸びる道路が、県道 47 号でかつての久米大通りを踏襲しているが、写真 2 に示した県道 47 号はその幅員も拡張され、以前と比べると直線化されていて、微妙に屈曲していたかつての久米の中軸道路の面影は見られない。また写真 3 はロータリー東の陸橋上から泉崎を撮影したもので、工事中のモノレールの軌道の脚もとには久茂地川が流れている。しかし後述するように、この部分の久茂地川は明治初期には河口部に当たっていて川幅も広く、現在の国道 58 号もその半分は流路であった。写真 5 は、唐栄久米村当時の大門に近接して立地している沖縄オーシャンビューホテルの最上階から北に向かって撮影した写真である。写真左約 3 分の 1 を上方に伸びる道路が県道 47 号すなわち久米の中央道路であるから、写真にはかつての久米村の大部分が入っていることになるが、中高層ビルによって占拠されてしまったこの地区には、後述するような緑豊かな林に囲まれていた唐栄久米村を偲ばせる風景は存在しない。ただ、県道 47 号の上方には波上宮の位置する丘があり、写真 4 に示した天妃小学校に隣接して残る市史跡の上天妃宮跡の石門とともに、わずかに琉球当時の光景を想像させてくれる。天妃は中国の福建省一体で広く信仰されていた航海を守る女神で、冊封使や進貢船中に禱られていたもので、梵鐘の銘などから 15 世紀中頃の建造とされている。石垣の積み方は布積みからあいかた積みへの移行期とされている。また 1 丁目の国道 58 号に面する孔子廟跡地に啓聖廟址・明倫堂址碑と大成至聖先師孔子像が建立されているが、孔子廟は若狭 1 丁目の天尊

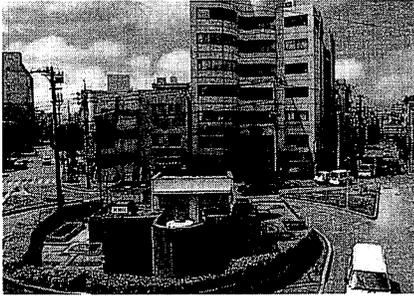


写真1 久米大門の位置したロータリー



写真2 旧久米大通り(現県道 47号)

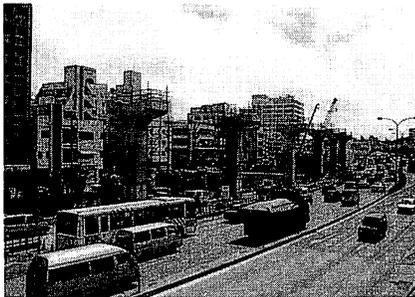


写真3 国道 58号と久茂地川

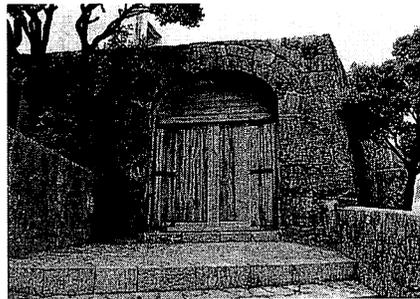


写真4 上天妃宮石門

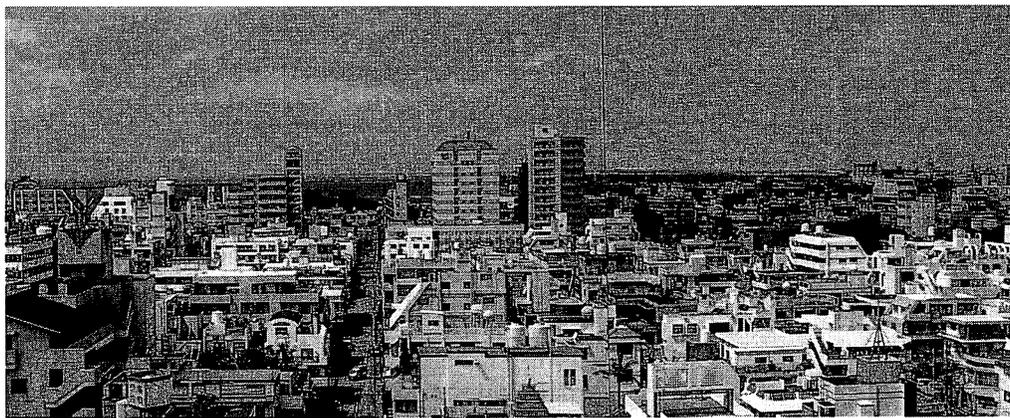


写真5 旧唐栄久米村の全景(沖縄オーシャンビューホテルより)

廟敷地内に移転されている。

ところで、旧久米村が地形的にも人工的改変を受けていることは先にも述べたが、試みに、現在の1:2500都市計画図に記される標高点からその起伏をたどってみよう。かつての久米大門すなわち現在の沖縄オーシャンビューホテル西南部のロータリーの標高は2.9mである。この地点から県道47号を北西すなわち波之上宮へたどると、2.6m、2.9m、3.0m、4.0m、4.1mというように北西に向かって微妙に高まるが、至聖廟の北西コーナー近く（波之上宮の石段下）では逆に3.9mから2.7mとやや下つてのち水平距離100m足らずで海岸に達する。またこの道路との間の約200m東をほぼ平行する道路は国道58号付近では4.0mであるが、4.0m、6.6m、9.0mというように松山公園と福州園に挟まれた部分の微高地を越えた後は北西に向かって6.1m、3.0m、2.6m、2.5m、2.2mというように下降して海岸に達している。さらに先の沖縄オーシャンビューホテル西南部のロータリーからやや北寄りの西方向に進んで現県警運転免許試験場に通じる直線道路の標高は、2.9m、3.9m、3.9mと西に向かってやや上昇し、3.0m、2.6mというように、ごくわずかながら下降している。これら南東から北西などに通じる道路とほぼ直交する道路として、例えば松山公園より約200m北方から那覇久米郵便局の北をかすめて南西に通じる県道43号をあげることができるが、松山公園北方から2.6m、3.0m、3.5mと南西に向かってやや上昇し、県道47号との交差点では4.0m、さらに南西に向かって4.6m、7.4mと上昇した後、南に向かって6.2m、3.0m、2.7mと下降している。

要するに、久米とその周辺の起伏は（もとより改変された後の状況でしかないが）、南の大門と波之上宮との間にごくわずかながら微高地が存在しており、また全体としてはほぼ平坦な久米の周辺に、松山公園(12.4m)、波之上宮と旭ヶ丘公園(19.5m)、三文珠公園(約8mか?)の小丘が東・北・北西に点在しているといえることができる。ただ、この三箇所の小丘は元来は孤立した点的な小丘ではなかったと考えられている。要するにこの地区の地形は、基本的には「海岸低地」から成っているが、松山公園を中心とする直径約500mの範囲と三文珠公園や第2図の辻原及び辻と西の間に存在した林を含むこれもまた直径約500mの範囲の「中位段丘下位面」が幅約100mの間隙をおいて広がっており、海岸部の波之上宮と旭ヶ丘公園は「石灰岩堤」であると推定されている⁶⁾。「中位段丘下位面」は自然的な開折もしくは人工的な改変によって、現在では微高地としての段丘面は極端に縮小されてしまっているが、後述するような明治初期の林は、もともとの「中位段丘下位面」がある程度残っていた地ということになる。

いずれにしても、このような地形に由来する起伏が、かつては現在よりも色濃く残っていたわけで、琉球時代の地形が大幅な改変が行われる以前であることを考慮に入れると、唐栄久米村を考える場合にかなり重要な意味を持っているように思われる。すなわち久米の南の大門は

この地区で最低所であり、北の西武門は1 m 余り高い。しかも先に記した県道 47 号そのものの標高は西武門の地点から下降しているとはいうものの、波之上宮や護国寺のある旭ヶ丘公園の小丘は、久米の中軸線とも言うべき現県道 47 号のうちで久米村域の県道 47 号を直線的に結んだ延長線上、換言すれば南の大門と西武門を結んだ直線の延長線上に位置しているのである。いわば唐栄久米村は北に高所を控え、主要な入り口である南の大門が最も低くて、現状から言えば久茂地川に面し、かつ東と北西にも高所を有しているのである。この点については後述することとしたい。

3 唐栄久米村の景観復原

(1) 「昭和初期の久米とその周辺の道路」の復原

かつての唐栄久米村の景観が、いまやほとんど掻き消されてしまっていることは、繰り返し述べてきた。しかし、当時の様相を地図の形に復原・表現したものが皆無であるわけではない。後述する明治時代に作製された伊地知貞馨氏の「那覇及び久米村図」や嘉手納宗徳氏による「那覇市街図（明治初年）」などが刊行されていて、貴重な史料となっている。しかし、これらはあくまでも地図の域を超えるものではなく、正確な形態や距離あるいは位置関係などを論ずるには、やはり不十分であると言わざるを得ない。

その点で、那覇市文化局歴史資料室によって作成された「那覇地区旧跡・歴史的地名地図⁸⁾」は、1996 年当時の 1 : 2500 現況図（都市計画図）を基図（印刷上は 1 : 6000 の縮尺）にして、その上に旧跡や歴史的地名を記入したきわめて価値のあるものとなっている。この図には、久米大門跡、西武門跡、下天妃宮跡（後 那覇郵便局）、上天妃宮跡（後 天妃尋常小学校）、上天妃宮跡の石門、安仙ビラ跡（ハブ坂）、程順則生家跡、清泰寺跡（忠尽堂）、東寿寺跡（堂小）、堂小屋敷跡、内兼久山跡、才の神跡、孔子廟跡・明倫堂跡（現 商工会議所）、久米村学校所跡、鄭嘉訓生家跡、魏士哲旧宅跡などの所在地が記され、さらに昭和 10 年代の道路なども記されている。それ故、往時の久米とその周辺地域の概要は、この図によって知ることができる。

しかし、この貴重な図にも欠点のあることは否定できない。「那覇地区旧跡・歴史的地名地図」を含む『那覇市旧跡・歴史的地名地図』全体の凡例にもあるように、この図は往時の概観・集落等を明確にするため、昭和 10 年代後半を想定して海岸線や道路が標記されているが、道路は集落間の主要幹線を中心に標記され、原則として集落内の道路は省略されている。したがって久米に限っていても村内の道路は記入の対象外となっている。また改修による河川の変化や道路の幅員の変化は考慮に入れられていないし、確定し難い当時の場所・道路については点線で標記されている。変貌の著しい久米とその周辺については、ほとんどの道路が点線で記され

第1図 昭和初期の久米とその周辺の道路推定図



ていて、大縮尺での久米村の景観を検討するには難点も多い。道路を点線で記入している以上、当然のことながら付近に存在した各種の施設についても大概の目安で示していることが明記されているわけで、したがって、「本地図は、歴史・民俗学習に資するために作成したものであり、土地・境界・所有権等の諸問題とは、一切関わりを持たない」というきわめて良心的な注記が明示されているのである。

そこで、まず作製したのが那覇市発行の1:2500都市計画図⁹⁾をベースにした第1図「昭和初期の久米とその周辺の道路推定図」である。作製にあたっては上記の「那覇地区旧跡・歴史的地名地図」を基本的な資料として使用し、加えて旧版地形図（例えば陸地測量部参謀本部「那覇」、大正8年測図、同10年7月25日発行）や昭和12年発行の「那覇市全圖」（1:6000）などを参考にした。しかし、これらの資料には当該地域の道路のうちでも主要な道路のみが記入されているので、主要道路以外の道路に関しては、後述する「戦前の久米・天妃町民俗地図」などを利用した。また海岸線に関しては、主として「那覇地区旧跡・歴史的地名地図」に拠り、旧版地形図をも参考として記入した。ただしここで提示している第1図をまず作製した後に、第2図を作製、しかる後に第3図を順次作製したわけではなく、具体的な作業としては、第1図・第2図・第3図を行きつ戻りつしながら補正を加え続けるという手順となったことを付言しておきたい。

上記のような手順によって作製した第1図は、それなりの正確さを有していると考えている。もちろん第1図に示したように現在の道路と少しでも重複している部分は、県道47号の那覇防衛施設局付近から至聖廟前までの道路（かつての久米・天妃町の境界や以前からの久米大通りが意識されたと思われる）、国道58号の道路敷のごく一部（かつての電車軌道や久茂地川の流路によって規定されたと思われる）、現沖縄オーシャンビューホテル西側のかつての久米大門のあった場所のロータリー（久米・天妃町の範囲と久米大門すなわち久米の入口が意識されたと思われる）、天妃小学校東の道路の一部（上天妃宮石門が規定要因になったと思われる）、那覇商業高校と大典寺の間の道路（福木山や公用地さらに大典寺の境界によるとと思われる）、西武門から那覇久米郵便局北側の道路（西武門の位置と北及び南に迫る山林の間を通る道路が規定要因になったと思われる）などでしかないので、第1図が最終的な正確な図であるとは残念ながら言えない。また道路の幅員に関しても、後述の昭和初期の屋敷地の位置や範囲などから相対的に割り出したもので、あくまでも想定の域を出ないものであることも断っておきたい。しかし敢えて言えば、現段階では、最も蓋然性のある推定図と言っても大過はないであろう。

ただし、この第1図も前記の「那覇市旧跡・歴史的地名地図」と同様に、その目的はあくまでも歴史地理研究上のものであって、土地・境界・所有権の問題に関わる資料とは成り得ない

ことを明記しておきたい。要するに第1図は、第2図や第3図を作製する上での作業図である。したがって、ある程度の正確さは有していると思われるものの、厳密に照合すれば相当のずれが認められるであろう。にもかかわらず、筆者が敢えて、正確な大縮尺の都市計画図上に記入した作業図を提示した意図は、次の点にある。すなわち、往々にして歴史地理学や考古学の論文には大縮尺の地図を基図にしながらも、公表されるのは最終的な編集図であるという傾向がある。論旨の展開にとってはそれで充分であるとはいえ、作業過程の図が省略されている故に、その作業がどれほどの精度でもって行われているのかということが不明となり、ひいては他者による再検討や検証が不可能となる。したがって、本稿で対象としているような現地表面上に復原の基準となるような事物がほとんど残されてはいないような場合は、特に復原作業の精度と限界を明示して、後の批判や検証の材料を提示しておきたいというのが、筆者の意図である。

(2) 「昭和初期の久米とその周辺の景観」の復原

第2図の作製においては、第1図をベースにして景観を復原する方法をとったが、最も主要な拠り所としたのは那覇市歴史資料室に保管されている戦前の景観を示した「民俗地図」である。那覇市においては1970年代に第二次世界大戦前の歴史的景観を当時現地に居住しておられた人達の記憶によって復原していくという作業が実施されて、きわめて貴重な史料として残っている。ただし所有権などの問題もあって、正式の報告書としては印刷されていない。

本稿で使用したのは久米とその周辺地域の数葉で、久米、天妃、泉崎・湧田、辻、上之蔵、久茂地、東、大門前の図である。このうち久米については、A「戦前（昭和6～7年想定）の久米・天妃町民俗地図（西部、東部）」（具志堅以徳・高嶺明敏・新垣沢正・具志良翰・安仁屋維垣・国吉有慶の各氏で記入、1976年3月24日に糸嶺篤忠氏が宗家記入）と、B「戦前（大正6年頃）の久米町民俗地図」（池宮城国珍氏作成原図、作成年不記入）の2葉がある。

これらの図は、完全に統一した基準で作成されたわけではないように思われる。例えば、久米の図は、Aは久米と天妃町、Bは久米町としながらも、ともにほぼ同じ範囲を収録している。またAは昭和6～7年、Bは大正6年頃の景観復原を目的にしている点でも、作成時の基準が必ずしも統一されていたわけではないことが窺えるのである。またこのA図とB図を比較すれば、A図の方が、道路や街区の形状に関する正確さという点で優っているように思われる。これはおそらく図の作成時に利用した基図の相違に拠ると推定できる。すなわちB図がいわば見取図の段階にとどまっているのに対して、A図はかなりの精度を持った図を基図として作成されたと思われる。と言うのは、前記した図のうちで、このA図と泉崎・湧田、上之蔵、久茂地、

東、大門前の図は、久米B図と辻の図とは明確に異なる精度を有しているように思われる。特に上之蔵町の図は地番や地筆界線の入った図の上に戦前の状況が記入されており、東町の図も注に記したように地番図を原図として利用して作られたと推定し得る。上之蔵町の基図には上之蔵町の周辺部まで記載されていて、その部分の道路や街区の形状は、久米・天妃町の民俗地図に記載されている道路・街区と同様で、久米・天妃町のA図も上之蔵町や東町の原図と同じ地番図を利用していることは明らかである。また泉崎・湧田、久茂地、大門前の図も、上之蔵図と東原図→久米・天妃図→久茂地図と大門前図→泉崎・湧田図というように順次繋ぎあわせて検討すれば、同様の地番図を使用している可能性が高い。残念ながら、この地番図がどのようなものかは確認し得ないが、少なくとも第二次世界大戦前の道路・地筆界線・電車軌道・主要施設のほかに地番も記入されており、いわば地籍図としての役割を果たしていた図であると思われる。このようなことから、久米・天妃町に関してはA図の方を優先して使用し、B図は参考にとどめた。また辻についても、上之蔵図に記載されている辻の一部の道路や街路を参考として補正した。

以上のような方法で作製したのが、第2図である。「民俗地図」には住宅の居住者名や商店の名称（業種）なども記載されているが、本稿の目的からはややずれるので、蔡氏宗家などの宗家を除いて第2図では省略している。また久米・天妃町、久米町、泉崎・湧田町、東町の図には、当時存在した電車軌道も記載されているが、これもまた省略した。さらに各施設の名称は、久米・天妃町に所在するものと、隣接しているかつては久米村に所属していた可能性のある範囲に限定して記載した。ただし同じ第二次世界大戦前とはいいながら、これらの「民俗地図」は対象とされている時期が微妙に異なっており、したがって第2図の道路・街区・地筆は、完全に同一時期というわけではない。甚だしきは久米のA図とB図に記載されている範囲の一部が、「大門前民俗地図」に記載されている。具体的には第2図の孔子廟から那覇郵便局に至るまでの大門前通と呼ばれていた道路北側のブロックがそれで、この「大門前民俗地図」の対象時期は昭和10～15年で、久米A図の昭和6～7年とB図の大正6年頃より後のものであるために、孔子廟の西南及び蔡氏宗家・藺氏宗家のあるブロックの南側は、細分化されている。昭和6～7年頃から約10年の間に、大門前通に面した場所の細分化が行われた結果であると考えられるが、後述するような屋敷地の細分化という現象として把握することができる。なお、「大門前民俗地図」に記された昭和10～15年頃の地割のうち昭和初期の久米・天妃町に属する範囲の地筆は第2図に点線で記入した。しかし、大門前通よりも南側については時期が異なるものの、昭和10～15年頃の状況を実線で記入せざるを得なかった。

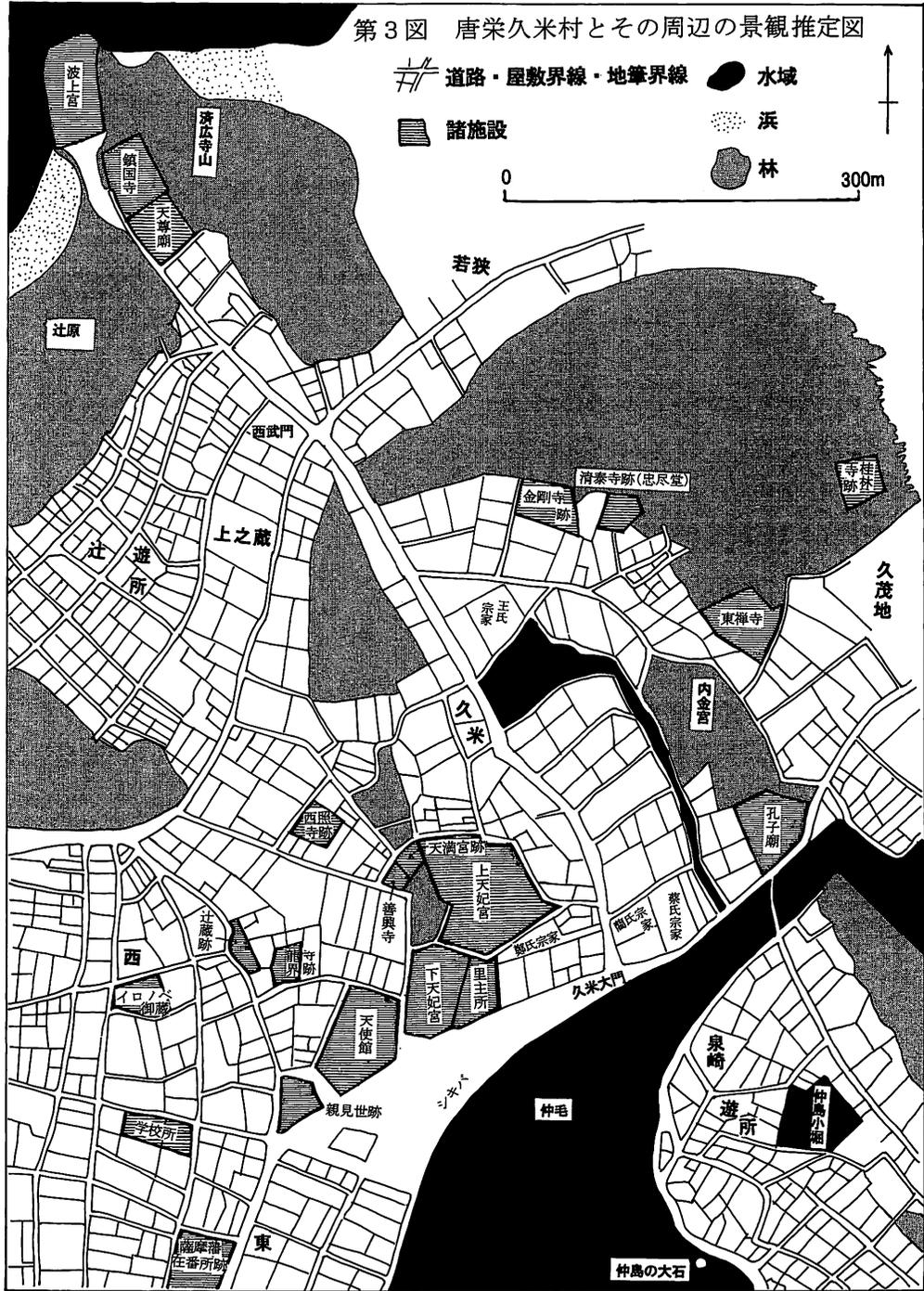
(3) 「唐栄久米村とその周辺の景観」の復原

第2図をベースとして、嘉手納宗徳氏による「那覇市街図（明治初年） 那覇読史地図」を、重ね合わせて作製したのが第3図である。この図は、嘉手納宗徳氏によれば、明治初年（10～20年頃）の歴史の跡を知るために作製された半鳥瞰図的なもので、資料としては『球陽』、『沖繩志』（伊地知貞馨氏）、『南島風土記』、『大正12年番地入り那覇全図』等を参考としたものである。「作業に当たっては、70歳代の古老10名ほどを週1回東恩納文庫に集め、草稿の検討や話し合いをしてまとめた後に持ち帰り、各自で校訂をして再三にわたって種々検討・校訂作業を繰り返し完成に至った¹¹⁾」と言う。この労作は、先に見た第二次世界大戦前「民俗地図」と同様にきわめて重要な価値を持っているが、嘉手納氏は、「しかし、この地図中に盛られた事物のうち、現存するのは「御物城」「三重城」「波之上宮」「護国寺」などわずかであり、したがって、この図からかなり正確に歴史を読みとることができるのは、戦前の那覇を知っている人たちに限られよう。私自身、地図上のものが現在どこに該当するかを問われると返事に窮する時がある。現那覇市街図上への復原は、至難の業ではあるが、今後の研究・作業が大いに俟たれるところである。」と、謙虚に述懐される。

嘉手納氏の言われるように、正確な1:2500都市計画図を基図にして作製した第1図や第2図と比較すると、この図は道路や街区などの形状あるいは方位などの点で、若干の不正確さが認められはするものの、大要としてはかなりの程度まで実態を表現していると考えられる。したがって本稿の目的には十二分に適うもので、原則的にはこの図に記載されている事項を第2図の上に移していくという作業を行い、昭和初期には存在しているが明治初年には存在していなかった事物は削除していくという方法を採用した。

第2図と第3図を比較すると、約半世紀という短期間の間に、この地域が著しく変貌したことが如実に理解できる。そのうち最も目立つ変貌は、水域に関するものである。すなわち明治初年には久米の大門前には久茂地川の河口の幅が約75mもあって、いわば河口というよりは海が湾入していると言ってもよいくらいの広い水域が存在していた。ところが昭和初期には川幅は約25mに狭まって、もはや単なる川の下流部になってしまっている。また明治初年には久米村の内部にまで入り込んでいた久茂地川の支流と湛水池は、昭和初期においてはその痕跡しか残されていない。このことからかつての久米村は海から直接村内にまで入り込める舟運が利用されていたが、昭和初期には利用し得ない状況になっていたことがわかる。

さらに久米村の周辺に広がっていた林が、ほとんど消滅したこともわかる。久米北西部の林（上の山）は那覇尋常小学校に、その南の林は宅地に姿を変え、久米村北東部の林（福木山）も那覇高等尋常小学校や知事官舎あるいは第二高等女学校や松山小学校などの敷地として開発



されてしまった。内金宮（内兼久）の林もほぼ半分は縮小されて南部は宅地に化している。かつての林は、その大部分が公用施設の敷地として利用されていることから考えると、その所有はおそらくは公有地であったと推定できるが、後述するようにこのことの示す意味は大きい。

上記の水域と林のみではなく、久米村に存在していた諸施設も大きく変貌もしくは消滅してしまった。下天妃宮は那覇郵便局、上天妃宮は天妃小学校と宅地、金剛寺跡の敷地は宅地、里主所も宅地にその姿を変え、東寿寺と天満宮は昭和初期の「民俗地区」では見られない。さらに清泰寺（忠尽堂）や善興寺の敷地も変更されている。屋敷地（宅地）も後述するように細分化が進行し、道路も基本的には従来の道路を継承してはいるものの一部では消滅もしくは変更されている。

それ故、昭和初期の久米・天妃町には、かつての景観や施設は、ほとんど残っていないということになる。要するに、明治初年から約半世紀の間にきわめて大きな変貌がもたらされたわけであるが、逆に言えば、明治初年の久米には、琉球時代の唐栄久米村の景観が色濃く残存していたとすることができるのである。

4 唐栄久米村の景観とその構造

(1) 絵画・絵図史料との比較検討

唐栄久米村を描いた絵画や絵図は、すでに何点かその存在が知られている。例えば、葛飾北斎筆の「琉球八景」や、『琉球記』の「琉球図」、『會稽夏氏宗譜・使琉球録』、「奉使琉球図」¹²⁾には、唐栄久米村の景観が絵画として描かれているし、明治初年の久米村についても、伊地知貞馨氏「那覇及び久米村図」（『沖繩志』、1877年所収付図、沖縄県立図書館蔵）などがある。そこで本稿では、筆者による第3図の「唐栄久米村とその周辺の景観推定図」と、「琉球八景」、『琉球記』の「琉球図」、『會稽夏氏宗譜・使琉球録』、「那覇及び久米村図」との比較検討を試みたい。

「琉球八景」は葛飾北斎の筆に成るものであるが、北斎自身が琉球に赴いて描いたわけではない。1756年に冊封使として琉球を訪問した周煌が帰国後にまとめた報告書「琉球国志略」には琉球の名所を描いた「球陽八景」が収録されていたが、後に江戸にも届いて幕府が増刷した。ところが1832年には琉球国使節の渡来によって熱狂的な琉球ブームが起こった。このような状況下で葛飾北斎が「球陽八景」などをもとにして作製したのが「琉球八景」である。木版色刷、縦24.9cm、横37.6cmで、8枚のセット（泉崎夜月、臨海湖一潮か？一声、桑村竹籬、龍洞松濤、筍崖夕照、長虹秋霽、城岳靈泉、中島蕉園）¹³⁾である。これらのうち、「泉崎夜月」、「桑村竹籬」、「筍崖夕照」が、唐栄久米村あるいはそれに隣接する地を描いたものである。



第4図 葛飾北斎筆「琉球八景」より、「泉崎夜月」(上)、「桑村竹籬」(中)、「筍崖夕照」(下)
(浦添市美術館友の会発行の絵葉書より)



第5図 『琉球記』の「琉球図」(上)と『會稽夏氏宗譜・使琉球録』収録の図(下)



第 6 図 「那覇及び久米村圖」(伊地知貞馨氏『沖繩志』, 1877 年所収付図, 沖縄県立図書館蔵)

「泉崎夜月」は、久茂地川河口部に架かる泉崎橋を中心にすえて東方からやや南寄りに視線を設定しているが、基点は現国道 58 号上の泉崎橋の北西部(第 3 図で言えば孔子廟のやや西方)である。泉崎の屋敷が石垣に囲まれていた状況がわかるが、注目すべきは泉崎橋が石造で、しかもアーチ式の構造を持っていることである。もし泉崎橋がこの絵画のような構造を持っていたとすれば、中国の華中から華南において一般的に見られる橋梁の構造が琉球にも伝来していたことになる。右下に描かれた船の帆柱?ではこのアーチを潜り抜けることは不可能ではあるが、もう少し低い船もしくは帆柱をはずせば泉崎橋を潜り抜けることは可能であって、久茂地川を遡る舟運が存在していたことが理解できる。

次に「糸村(久米村)竹籬」は、久米村の屋敷群を描いたものであるが、描画地点は判然としない。久米大門や泉崎橋が描かれていないから、下天妃宮と里主所から東の久米大門までの久米村の南端の光景かとも思われるが、もしそうだとすれば手前の水域は久茂地川河口部、左下の石垣の施設が下天妃宮と里主所ということになり、図の上部に描かれる林は内金宮(内兼久)とさらにその上部の山は金剛寺・清泰寺・東禅寺の北部の松山ということになる。いずれにしても琉球特有の石垣に囲まれた屋敷(施設)のほかに竹籬をめぐる屋敷もあったことがわかる。

「筍崖夕照」には波上宮と護国寺が描かれており、波上宮の敷地や現在の旭ヶ丘公園の地形が多少の誇張はあるもののある程度は忠実に表現されている。描画地点は辻原の北の浜と考えられる。

次に『琉球記』の「琉球図」¹⁴⁾と『會稽夏氏宗譜・使琉球録』¹⁵⁾にも、久米村の周辺が描かれている。前者では那覇港に入って久茂地川河口に迂回する海上から見た光景が描かれているが、ちょうど中心部に「濱式場」、その右上に天使館が記されているものの、久米村そのものは省略されて実際の地形よりは誇張された蛾々たる山と岩が記され、また河口部の岸は現実とは異なって崖として表現される。したがって先の「琉球八景」と比較すると、少なくとも景観の表現としては、かなりかけ離れていると言える。同様に、後者にも天使館、天妃宮が描かれているが、やはり山の上に立地しているように表現されて、かなりの地形的な誇張が認められる。ただ後者では天妃宮の右下に「三十六姓營中」が記載されていて、明らかに唐榮久米村が意識されている点が異なる。このように両者は必ずしも景観復原の際の有効な史料とは言えないが、石垣に囲まれた天使館の様子や各施設の位置関係などは、第 3 図の復原図と照合してみてもさほどの相違はなく、実際の観察によった描写を基にしていることは認められる。

これらの絵画史料に比べると、伊地知貞馨氏「那覇及び久米村図」¹⁶⁾は、景観を表現したものとして格段に多くの情報量を有している。図には、久米村大門、上天妃宮、下天妃宮、善興寺、

孔廟、学校所、内兼久、久米村松尾、泉崎橋などが記入されている。また久米を縦断している南北道路の東側には久茂地川の支流が存在して久米中央部で湛水している様相、また南からその堰水池までに4本の道路があること、久米松尾・内兼久の山林はもとより上天妃宮の北西部の二箇所の林も記されている。これらの位置関係は、筆者による復原図ともかなりの程度まで整合しているが、しかし一部に疑問点が存在することも否定できない。すなわち主要な道路は数的にはほとんど大部分が記入されているが、その形態には相当の省略があることも事実である。また下天妃宮と天使館との位置関係にも疑問がある。さらに家屋が記入されているものの、その数は無数と言い得るほどで現実を描写したものとは考え難く、屋敷割すなわち地筆界も省略されている。それ故、大きな齟齬はないとは言え、唐栄久米村の景観を検討する場合は、第3図の方がより適切であると思われる。

(2) 唐栄久米村における風水思想

第3図は、前章で述べたことや種々の絵画や絵図史料との比較によってもわかるように、琉球時代の唐栄久米村の景観を大略的には表現していると言ってよい。とすれば、唐栄久米村の景観に、どのような意味を読み取ることができるのであろうか。そしてその背景には、如何なる理念が潜んでいるのであろうか。このことに関しては、従来から風水思想を強調する見解が強い。結論から言えば、筆者もまたそれに同調するものであるが、その根拠は相当に異なる。要するに既往の研究では、唐栄久米村の具体的な景観復原が成されていないために、いわば抽象的な議論の枠を脱しているとは言えない。

唐栄久米村が、中国から伝来してきた学問や技術の蓄積地であり、発信基地であったことは、改めて述べるまでもないが、その一つに風水思想による地理観があった。これについては多くの証拠があるが、例えば『北木山風水記』もその一例である。これは1864(同治3)年に久米村与儀通事親雲上鄭良佐が波照間と与那国を除く八重山諸島(北木山)の全村落の風水を見分けてその判断を述べたもので、村落の建設などに際して風水師(風水見)が強く関与していたことを示すとともに、当時としては先進的¹⁷⁾科学として重要視されていた風水思想の発信基地として唐栄久米村が中心的な地位を占めていたことを物語っている。このように、当時としてはきわめて斬新な地理思想と認識されていた風水思想の発信基地であった以上、唐栄久米村の景観や構造に、風水思想が積極的に取り込まれて具現化していたことは、むしろ必然であると言ってよい。

このような研究の例として、本稿では島尻勝太郎氏と都築晶子氏の論文を挙げたい。まず島尻勝太郎氏は、風水思想が沖縄に伝わったのは、『琉球国由来記』によれば1667(康熙6)年に

周国俊国吉通事が、存留通事として中国へ渡り、福建で学んで帰ったのが始であるとされているが、『球陽』では尚賢王3年(1650)の条に「唐栄地理記」が載せられていて唐栄人が古くから風水思想を学んでいた事が示されていたとする。そこで氏は、首里城・村落・墳墓の風水や、風水師と風水書について概観しているが、特に村落の風水については、久米村を事例として取り上げる。『球陽』尚賢3年の条の「唐栄地理記」と『遺老説伝』中に記事があるとして、久米村において風水が強く意識されていたことを強調している。すなわち

唐栄邑の前に一江有り。潮汐来潮して以って明堂と為す。南、之を望めば、即ち峰巒繞抱して以って錦幢と為す。奥山聳秀して以って文案と為す。後と左右とは、即ち林樹蜜囲して、以って玉屏と為す。且、中島の西に一塊の大石有り(此の一石は、泉崎の西に在りて唐栄の風水に係る。是に由りて、康熙癸丑<1673>紫金大夫金正春、経歴すること久遠にして、人の破る所と為ること有るを恐れ、題請して幸に愈允を蒙り、始めて唐栄に属す)。南門に時対して以って龍珠と為る。南門は以って龍首と為し、双樹は角を為し、双石は眼を為す。中街は蜿蜒して以って竜身と為す。西門は尾と為す。而して邑中、一条の小港有り。潮水往来して、以って其の威を佐く。且、泉崎橋の西に于て、二大石有り。江中より起りて、能く急流の気を鎖す。而して大いに情有り。此の数者の若きは、固より夫の風水の理に係るなり。軽きに非ず。

の記録をもとにして、久米村の景観を風水思想との関連において次のように論じている。

すなわち、久米村の南方に向かう門は大門と呼ばれていたが、ここからは一条の道が通じており、その北口はニシンジョウ(西武門)、その一帯もニシンジョウと呼ばれていた。大門の前は、もとは海で、風水上の明堂に当たる。この海の中には久米村毛小と呼ばれる半円形の突出部があって、松の木が二本植えられていたが、この突出部は龍頭と意識され、また二本の松の木は龍の角と考えられていたという。しかも、その左右に置かれた双石は、龍眼を表していたという。南北の大道は龍身とされ、龍頭すなわち突出部から少し隔たって、仲島の沿岸に大岩があるが、この大岩は龍珠と意識された。さらに、那覇港内の一小島である奥山は、久米村の風水では文案と考えられていた。

龍珠とされた大岩は、久米村では風水上きわめて重要なものとして認識されていたことは、本来は久米村の所属ではなかったにもかかわらず、1673年に王府に願い出て久米村の所属としたことから如実に理解することができる。この大岩は、現在も那覇バスターミナルの敷地内に、「仲島の大岩」と表記され那覇市の指定文化財として保存されている。

南北の大道は、龍身と認識されていた故に、当然のことながら、他の道路とは区別されていた。すなわち、その上を不浄なものが通ることは禁止されるなどの禁令もあった。例えば『遺

老説伝』によれば、1650（順治7）年薩摩の新納刑部死去の折に薩摩人はこの伝えを知らずに、葬列を大門から入れたので、台風が起こったと記されている。また1709（康熙48）年には、愚人がひそかに死屍をこの門から通したので、大風が7回も起り、その後が大飢饉になったとも記されている。要するに、大門に通じる南北の大道は、きわめて神聖な道路として認識されていたことになる。

要するに、久米村は、その全体を龍に見立てて、大道は龍身、北門は龍尾、大門の前に龍頭があつて龍眼・龍の角を持ち、またその前には龍珠もあつて、まさに龍の村というように意識されていたことになる。さらに前には明堂があり、後と左右には青龍、白虎の山が想定されて久米村を擁護しており、これらの要素を汚したり破壊することは、久米村の盛衰にかかわるとしていたことは、大石を他村に属するものであつても久米村に帰属させたことから理解しうる¹⁸⁾のである。

都築晶子氏もまた、久米村における風水思想について積極的な見解を述べているが、まず、風水が福州において学ばれて伝えられるに至ったという経路が考えられるとする。しかる後に、こうした中国からの琉球への風水の伝来を、「久米村家譜」・『球陽』・「首里家譜」などの史料を詳細に分析・検討することによってたどり、また福州における風水についても述べる。その上で、琉球における風水の知識の実態を解明しているわけであるが、久米村については「唐榮地理記」に記された風水景観論をもとにしてその実態を検討する。すなわち、「唐榮地理記」では、久米村そのものは中央を貫く通路が龍身に比喻され、久米村の前の一江（久茂地川旧河口）を「明堂」、南方の山々を「錦幢」、漫湖に浮かぶ奥山（奥武山）を「文案」、後方と左右の樹林を「玉屏」とし、中島（旧仲島芭蕉園）の西の海岸にあつて南門に対峙する「大石」を「龍珠」とされていることを述べるが、このこと自体は、先の島尻氏の引用とさして変わることはない。しかし、その解釈の点では、両氏の見解は微妙に異なっている。

都築氏によれば、明堂は一般に穴（ここでは久米村）の前方の平坦な地形を言うとする。氏によれば、八重山「風水書」に、明堂は局（穴）の前の左右の砂に抱かれた「広平」の地であるとされる。また錦幢と玉屏は穴を圍繞する景観の形状を言うとし、文案は、案山、つまり穴の前に位置する小山で机案に比喻されるが、案山のことを文案と名づけたのは唐榮士族の文人としての意識を投影していると思われるとする。龍珠が久米村の住民にとって重要視された大石で、王府に願い出て久米村にもらいうけたことが述べられるのは、先の島尻氏と同様で、1800（尚温6）年に冊封副使として訪れた李鼎元が風水で頻りに用いられる「文筆峯」と解釈したことも述べられる。かくのごとき久米村に関する面を述べた後に、氏は「一連の風水の術語を用いてその景観に名称を与えることによって、久米村は象徴的な意味を帯びた空間に変容

するのである。」と表現している。¹⁹⁾

以上のように島尻氏と都築氏は、微妙に異なる解釈を示しつつも、ともに唐栄久米村において風水思想が重要な意味を有していたとする点では、共通する見解を述べている。しかし、いずれも「唐栄地理記」の記載に従って風水上の解釈をするという段階にとどまっていて、具体的な景観と風水思想との関連にまでは説き及んでいないと言わざるを得ない。言うまでもなく、両氏をはじめとする唐栄久米村と風水思想との関連についての議論は、具体的な景観復原図を基礎としては行われてこなかった。したがって、あくまでも言わば漠然とした議論の枠内に終始せざるを得なかったのである。果たして、唐栄久米村の景観に、風水思想の影響を見出すことができるのであろうか。

久米村の中心道路が、龍身に比喻されていたであろうことは、第3図を見ても明らかであろう。久米大門から西武門に通じるこの道路は、唐栄久米村のまさに中軸であり、龍骨もしくは脊髄とでも称すべきものであった。内部の道路は全てこの中軸道路から通じていて、集落のプランはこの道路を抜きにしては考えられない。しかも北西上すれば、波上宮・鎮国寺・天尊廟という聖なる地に通じていて、この道路自体に聖なる意味が込められていたことは疑い得ない。先述したように、久米とその周辺の地形は、ほぼ平坦ではあるとはいえ、緩やかながらも南に下降しており、その南前面には水域が広がっているという状況も、聖なる龍身を具象化したものであることを示しているのではないか。この点で、中軸道路が、屈曲している事実は大きな意味を持っているように思われる。すなわち、首里城下町においても遠くの距離を見通せる直線道路はほとんど存在しないということは、すでに前稿において指摘したが、この久米大通りも南北を見通せるようなものではなく、悪気の直進が不可能なものとして造成されていた。

久米中軸道路(久米大通り)の屈曲が、それ故、偶然の屈曲ではなく明確な意図を持って造られたものであったことを証明する事実として、久米内部の道路形態を挙げるができる。すなわち久米村内部には、見通しのきく長い直線道路は存在しない。ほとんどの道路は緩やかな屈曲を有しているし、金剛寺跡付近にわずかに存在する直線道路も、林や屋敷によってその視線を遮断されている。直線道路ばかりでなく、四方を見渡すことが可能な四辻も存在しない。第3図に示された久米周辺の地区では辻・西・東・泉崎などで直線道路はおろか完全な四辻も認められるが、久米村の内部には存在しない。道路の交差点はそのほとんどがT字型交差点、すなわち行き止まりの交差点であって、一見すれば四辻のような機能を果たしている場合も、微妙な食い違いによって見通しのよい四辻であることを避けている。このことに関する例外が久米村内部に皆無であることを考えると、この事実は決して偶然ではなく、明確な方針の結果であると言わざるを得ないのである。この事実は唐栄久米村の建設に際して、風水思想が強く

意識されたことを示している。

また、唐栄久米村が東・北・西の三面を林に囲まれ、南に水域が開けていることも、風水思想に合う条件を備えていることを示している。首里城下町の中心部が林によって囲繞されていたことは、すでに前稿で明らかにしたが、筆者は、このことを風水思想によるものであったと考えた。同様のことが、この唐栄久米村においても成立するのである。琉球において、風水と植樹が密接に結びついたものであったことは、すでに都築氏によっても指摘されているが、蔡温によって奨励された植林事業は、台風などに対する防風林としての実学的な意味と同時に、風水の理論にも合うものであるとの認識が根底にあった。先述したように、久米とその周辺の起伏は、南の大門と波之上宮との間に微高地が存在しており、ほぼ平坦な久米の周辺に、松山公園や旭ヶ丘公園さらに三文珠公園の小丘が東・北・北西に点在している。これらの小丘は元来は孤立した点的なものではなく、松山公園や三文珠公園あるいは辻原及び辻と西の間に存在した「中位段丘下位面」と、海岸部の「石灰岩堤」であった。このうち、「中位段丘下位面」は開析や改変によって縮小されたが、第3図の林は、もともとの「中位段丘下位面」がある程度残っている地ということになる。したがって、唐栄久米村を囲繞している林は、本来は自然的なものであったと推定できるが、唐栄久米村の建設に際して、居住地として選定された範囲は切り開かれ、かつその周囲を取り囲むように整形と整備が実施されたと考えられる。

また、これらの林は、単なる樹林地としてのみではなく、それに付属して、当初からか否かは不明であるが、金剛寺・清泰寺（忠尽堂）・東寿寺・内金宮・拝所・孔子廟・上天妃宮・下天妃宮などの宗教的施設が建設されたことから類推しても、聖なる空間として意識されていたと考えられる。それ故、自然のままにはまかせず人工的な植樹や整備が積極的に展開されたであろうことは想像に難くない。このことに関連して注目すべきは、前章で述べたように、琉球時代には林であった地が、昭和初期には学校などの公用施設の敷地になっていることである。すなわち琉球時代の唐栄久米村を囲んでいる林や宗教的施設の敷地は、私有地ではなく、以前から公有地もしくは共有地であった可能性が高い。それ故にこそ、唐栄久米村全体を囲む林の存在が可能であったのであり、また宗教的施設などの公的空間として利用されることにもなったと考えられるのである。

さらに、久茂地川から内金宮の西を通る水路と久米村中心部に湛水している水域にも重要な意味が込められているように思われる。この水路は、久茂地川の支流というように記述される場合がほとんどで、本稿でもここまではそのように表現してきた。しかし、先述したように久米とその周辺の起伏は大略的には北から南に緩やかに傾斜していることや、水準点・標高点などから考えると、久茂地川から北に流れ込んで久米中心部に湛水するということは、少なくとも

も自然的には考え難い。したがって、この水路と湛水池は、人工的な掘削と整備によって造成されたものと推定することができるのではないかと。可能性は少ないが仮に久茂地川から流れ込む水路が自然的なものであったとしても、湛水池そのものは人工的に掘削・整備されたものであることは、否定できないように思われる。そしてこの水路と池は、舟運の目的を持つものであったと同時に、風水思想に基づくものであったと考えたい。先にあげたように都築氏は、明堂は一般に穴（ここでは久米村）の前方の平坦な地形で、八重山「風水書」に言うように、局（穴）の前の左右の砂に抱かれた「広平」の地であるとされながらも、明堂は久米大門前の海に比定しておられる。このことに関しては、先の島尻氏も同様である。しかし、筆者は、まさしく久米中心部に存在した湛水池こそ穴であり、そこから久米大門までの広平な地が明堂であったと考えたい。都築氏や島尻氏のように明堂を久米大門の前の海とすれば、明堂は唐栄久米村の外に位置するという矛盾が生じるが、久米大門より北で湛水池より南と考えれば、この矛盾が解決され、従来から言われている理想的風水地形にも整合する。また錦幢と玉屏は穴を圍繞する景観の形状を言うとするれば、唐栄久米村を取り囲んでいる林とそれに付随する一連の宗教的施設ということになる。

敢えて言うならば、唐栄久米村のプランには、四神相応という側面も意識されていた可能性は高い。海岸に屹立した波上宮の微高地は、玄武としての意味を有していて、鎮国寺や天尊廟もそれに付随して建設されたと考えられる。また朱雀は久米大門の前に広がる水域であった可能性が高いし、とすれば青龍と白虎は、上記の林とそれに伴う宗教的施設のいずれかが相当するものとして意識されたと考えても大過はないであろう。

いずれにしても、以上のような状況を考えれば、唐栄久米村の建設に当たって、風水思想がきわめて重要な基本理念として意識されたことは、確実なように思われる。琉球における風水思想を論じている既往の研究では、往々にして具体的な地形や施設の配置が風水に適うものとして「読み替えられた」とされることが多い。しかし、筆者の指摘したような、林の形態、水域の在り様、道路の形態、諸施設の配置などを考慮に入れると、それはもはや「読み替えられた」というようなものではなく、まさしく明確な意図を持って創設されたと言わざるを得ないのではないかと。したがって、唐栄久米村は明らかに、人工的に創り上げられた風水の空間であり集落であったと表現してよいであろう。このように風水思想の具現化を強調してこそ、琉球で重要視された先進的科学思想としての地理観の発信基地としての唐栄久米村をはじめて理解することができるのである。

またこの唐栄久米村の平面形態が、円形もしくは楕円形を呈していることにも注目すべきであろう。首里城下町に、円形や楕円形の道路網や街区が卓越していることについては、すでに

述べた。首里城下町では、その中心部を囲む林もまた楕円形の形態を有していた。首里と久米における円形ないし楕円形の卓越は、何に拠ったものであろうか。先にも推定したように、中国の都市形態の影響が色濃く反映しているように想定できるし、特に福州の形態との類似などは無視できないようにも思われる。敢えて言えば、首里城下町建設の際にも、唐栄久米村の形態が影響を与えたと考えることも可能ではあるが、このことについては仮説の段階を出ない。

さらに、筆者としては、林によって唐栄久米村が取り囲まれているという事実²⁰⁾に込められた意味について、いまだ少し考察の翼を広げてみたい。先に首里城下町の中心部が林によって囲まれていることを指摘し、その事実には、単なる防風機能のみではなく風水思想が濃厚に反映していることを述べた。また現段階では予察的なものでしかないが、琉球の村落には林によって囲まれている事例が多い²⁰⁾。しかも唐栄久米村の場合は、単なる自然林ではなく、かなり人工の手の入った林によって集落が囲い込まれていることは本稿で繰り返し述べた。これらの琉球における都市や村落を囲繞している林は、仲松弥秀氏が名著『神と村』などで展開された「腰当(くさて)」の森とは異なるものである。もとより筆者は、仲松氏の展開された御嶽の神が村を「おそい(守護)」し、村人が御嶽の森に「腰当(投げかかる)」されているという理論を否定するわけではない。ただ、御嶽と一部共通はするものの、都市や村落全体を囲い込んでいる林(森林)が広範に存在している事実を敷衍していけば、ある種の風土論もしくは文明論にまで展開し得る可能性があるのではなかろうか。

すなわち、筆者は、東アジア世界の都城について論じた際に、中国の場合は「土の城壁」、朝鮮半島の場合は「石の城壁」が卓越することを述べた。ところが、日本の場合は、都市全体を囲む城壁の存在がきわめて希薄であって、古代の大宰府の前面に構築された水城と豊臣秀吉によって造られた京都を囲い込む御土居のほかにはほとんど認められないことを述べた。そして日本の場合は、都市全体を囲い込むものとして、河川を挙げるべきであり、日本列島における河川の規模が小さくて人工的な制御や改変が可能であることを強調した。日本の場合は「水の壁」敢えて言えば「水の城壁」が一般的であるとしたわけである²¹⁾。このことを敷衍するならば、琉球の場合は、「林の壁」あるいは「森林の壁」という設定が可能ではないか。さらに、風水思想における良気の流出を防ぎ悪気の流入を防ぐという意味や、防風林としての機能などを含めて、それに防御という意味を込めるならば、「林の城壁」もしくは「森林の城壁」ということになるが、亜熱帯の樹木の稠密さを考えれば、単なる「林」ではなく、「森林の城壁」という表現が適切であるように思われる。これらのことを追求していくことによって、中国大陸、朝鮮半島、日本列島、琉球諸島における都市論・集落論・都城論に新たな視点を提示できるように思われるが、詳細については後日を期したい。

(3) 面積から見た屋敷地

復原した唐栄久米村の構造を考える一環として、面積の面から検討したい。言うまでもなく、今までに唐栄久米村の正確な復原図は作製されていないから、各種の地目別にその面積を検討した研究はないからである。ただ地目別の面積と言っても、それを具体的に示す史料はない。したがって本稿では、「第3図 唐栄久米村とその周辺の景観推定図」²²⁾上で計測した結果をもとにして検討することとした。

まず「第2図 昭和初期の久米とその周辺の景観復原図」に示された久米町・天妃町（両町はもとの久米村にほぼ相当）の範囲を「第3図 唐栄久米村とその周辺の景観推定図」に投影してその面積を計測してみると、総面積は155800m²となる。この数値には、当該範囲を囲んでいる道路敷地は含んでいない。すなわち久米・天妃の西端の上之蔵や西との境界線になっている道路（善興寺や下天妃宮の西の道路）や東端の久茂地との境界になっている道路（東寿寺、内金宮、孔子廟の東の道路）および海岸（河口部）に面した久米・天妃南端の道路は除外している。それゆえ、この155800m²という数値は、厳密な意味での久米町・天妃町の面積ではなく、周辺道路敷地の中心部で周囲との境界が設定されていたとすれば、久米町・天妃町の面積は約16haということになる。

ただしこの数値は、昭和初期の久米町と天妃町の範囲を示したものであって、かつての唐栄久米村の範囲はこれよりもかなり広がったと考えられる。例えば『久米村の民俗』によれば、古老の話として、那覇高等尋常小学校（福木の山の学校）、県立第二高等女学校、松山小学校はもちろんのこと県立病院、聯隊司令部、トーゴマーチューまでの全てがクニンダマーチュー（久米村松尾山）²³⁾と称されて久米村の地所であったと記されている。したがって琉球王朝時代の唐栄久米村の面積は、16haよりもかなり広大であったわけで、以下に述べる久米村の全面積に占める屋敷地の割合などは、本来はもっと低いということになるが、本稿では面積については昭和初期の久米町と天妃町の範囲を一応の基準として論を進めたい。

この155800m²の中には、当然のことながら諸々の地目が含まれている。まず5箇所²⁴⁾の林については、西北部の林が10800m²、その南の林が2100m²、さらにその南の上天妃宮の西の林が1600m²、東北部すなわち清泰寺や東寿寺の北の林が13600m²、内金宮の林が8900m²という数値が得られた。林の合計面積は37000m²である。

寺院などの諸施設については、天満宮・善興寺が800m²、上天妃宮が7100m²、下天妃宮・里主所が4900m²、金剛寺跡が1800m²、清泰寺跡が900m²、東禅寺が2500m²、孔子廟が2700m²であって、これらの合計面積は20700m²である。

一方、内金宮の西側からその西北に広がる水域の面積は6500m²で、この水域と先の林、寺院

などの諸施設を合計すれば 64200m^2 となって、久米村全体の 155800m^2 から 64200m^2 を引いた 91600m^2 (約 59%) が屋敷地と道路敷地の面積ということになる。もっともこの全てが久米村の住民にとっての居住面積であったわけではない。すなわち、 91600m^2 の中には道路敷地が含まれているわけで、これを引いた数値が居住面積すなわち屋敷地ということになるが、道路敷地面積が不明である以上、屋敷地の正確な数値は不明であると言わざるを得ない。しかし、敢えて試算を試みたい。久米村の道路はその幅員が場所によって様々であったと考えられるわけで、例えば久米大門から北に通じる中軸道路などは相当の幅員を有していたと思われる。また北東部の金剛寺や清泰寺や林に通じる道路や内金宮の西の水域両側の道路などは、おそらくはごく狭い幅員しか有していなかったと想像できる。しかし、いま仮に道路の平均幅員を 3m と仮定してみよう。図上での計測によれば、久米村内部（先述の久米村周囲の道路は除外した道路）の総延長距離は約 2880m である。これに 3m を乗じれば 8640m^2 、 100m^2 未満を四捨五入した数値の 8600m^2 を一応は道路敷地の面積というように想定しておきたい。

とすれば、 83000m^2 が、唐栄久米村に居住した人達にとっての居住地面積ということになり、それは久米村の 155800m^2 の約 53% ということになる。

この 83000m^2 が唐栄久米村における屋敷地の面積の合計として、どれだけ正確であるかということについては、先述したように作図上の誤差や、方眼法による計測上の誤差もあって、あくまでも概数の域を出ないことは言うまでもない。しかし、唐栄久米村における屋敷地の大体の傾向を見るには、それほどの大過はないとも考えられる。以下、いくつかの試算を試みたい。

第3図に示される屋敷地は、132区画である。唐栄久米村については、『中山世鑑』や『中山世譜』に記されるように1392年に明から賜った「三十六姓」という数値が有名であるが、果たして「三十六姓」が実際に渡来してきたのかということについては疑問が多いとする見解が一般的で、「三十六姓」というのはいわば「そこそこ多くの」という程度の漠然とした数値とする説が強い。また17世紀初には、当初は三十六姓であったか否かは別としても、わずかに5姓（蔡、金、梁、鄭、林）を残すだけとなり、1607年には新たに阮・毛の2姓を下賜されたとされる。一方、『海東諸国紀』には「中朝人來り居す者三千余……家別一城を築き之に処す」とあり、『李朝実録』の1456年の朝鮮漂流民梁成らの言葉に「……館傍の土城に百余家有り、皆我が国及び中原（中国）人之に居る」²⁴⁾とある。仮に「三千余」の人口があったとすれば、唐栄久米村の人口密度は約 $3600\text{人}/\text{km}^2$ ということになり、これは現在の日本の東京都や大阪府あるいは神奈川県や大都市の都市域の人口密度に匹敵することになって、いわば超過密都市ということになるが、「三千余」という表現は、人口が多いということを示す漠然たる表現と解釈するのが妥当であろうと思われる。

現に田名真之氏によれば、『久米村日記』（真境名安興『沖縄教育史要』所収）には、「大明末頃は久米村人数衰微し、老若者僅三十人程罷成り…」というように一時は衰微していたが、1654年には305人、1690年には558人、1729年には1507人に急増している。²⁵⁾したがって、唐栄久米村の繁栄期にはその人口は1500人を超えていたことは確実で、当時の琉球では有数の人口稠密地域もしくは都市的な地域であった。ただ前述したように明治13年の戸数1510、人口6038という数値もあることを考えれば、「三千余」という表現を完全に無視するわけにはいかない。明治36年の字久米（大正3年の久米町1丁目・2丁目と天妃町1丁目・2丁目）の戸数が783、人口が2575であることを考えれば、明治13年の数値には他地域に居住して本籍を残している人達や寄留人口などをも含んだ実際よりは膨張した人口数の可能性が高いが、いずれにせよ、このことに関する検討はさておき、屋敷地面積の考察に戻りたい。いま、きわめて単純に83000m²を図上に示した明治初期の屋敷数の132区画で除すると、628.8m²すなわち約600m²が、屋敷地の平均面積ということになる。その当否はともかくとして、とりあえずこの数値は、琉球においてはさほどの違和感のない数値であることは事実である。

すなわち、坂本磐雄氏による沖縄の集落における宅地の面積に関する検討によれば、「画地の面積・形状が一定である集落の敷地条件」として、1710年代の2例はともに900m²、1771年以後明治までの5例は729、900、1156、784、900m²、明治以降は年代順に並べれば841、576、192、460、360、486、600、999、526、600、486、572、486、300、600、600、440、560、540、486、486、418m²という数値が提示されている。1710年代以降明治までのその平均値は896m²すなわち約900m²で、明治以降の平均値は528m²すなわち約530m²である。これらのうちで、1710年代以降明治初年の2例までは敷地の形状が正方形であるが、いずれも1737年の規制の9間角（6尺5寸でいえば18m角）を上回っていて、特に27～30mにほとんどが分布している。ところが正方形の敷地形状は横長になっていくが、これは付属屋の下手配置を有利にするもので、1950年代以降の新村で確立していったが、その要因としては、以前と比較して付属屋の種類が増えかつ規模が大きくなったことと、宅地面積が600m²以下に限定されたことにある²⁶⁾と考えられている。

坂本氏による数値は、主として村落すなわち農業集落における屋敷地である。一方、本稿で対象としている久米村は、少なくとも琉球時代の唐栄久米村の成立の経緯や機能からして純然たる農業集落であったとは考えられない。成立の経緯や機能また人口規模や人口密度をもあわせて考えると、いわば都市的集落であったと言ってよい。そして一般的には農業集落における屋敷地面積は、都市における屋敷地面積よりもはるかに広いというのが通例である。このことからすれば、本稿で示した約600m²という平均面積は、違和感のない数値であると同時に、む

しろ広大であるとするのが適切であろうとも思われる。

しかし、この平均面積 600m^2 という数値は、あくまでも明治初期の久米村に関するもので、唐栄久米村の屋敷地については、明治初期の復原図に示された 132 区画を指標として考察することに大きな問題があることは言うまでもない。「三十六姓」が事実か否かは別問題としても、唐栄久米村の創設当初から 132 区画もの多くの屋敷が存在したとは考えがたく、次第に分家や分筆によって、屋敷地の数は増加していったと考えることにはさほどの無理はないと思われるからである。直接的な証拠とは成り得ないが、第 2 図と第 3 図を比較すれば、明治初期の 132 区画に対して、第 2 図の昭和初期の屋敷地は 232 区画にも増加している。もっとも明治から昭和にかけての間に、上天妃宮西北の林や内金宮の林の南半部は宅地として造成されているし、内兼久山（内金宮の地）の西に沿って流れていた久茂地川の支流とそれによって湛水していた水域も、昭和 9 年には埋め立てられて宅地となっている²⁷⁾。したがって新たな宅地の造成があったことも事実であるが、これら新造成地の宅地は約 30 程度でしかなく、それ故、明治初期から昭和初期までの半世紀の間に、かつての 132 区画は約 1.5 倍にまで増えている。逆に言えば、屋敷地区画 1 軒の面積は平均すると 3 分の 2 に減じているのである。このことは単に久米だけではなく、通常の都市ないし都市近郊地帯においては一般的に言えることであろうが、それはさておき、唐栄久米村における屋敷地の面積を論ずる際には、単純に先述の 600m^2 は指標とは成し得ない。要するに、少なくとも創設当初もしくは盛時の唐栄久米村は、もう少し大きい屋敷地の区画によって構成されていたのではなかろうか。

やや大胆に過ぎるかもしれないが、第 3 図中に示した 5 軒の「宗家」を取り上げてみたい。第 2 図には 6 軒の「宗家」が示されているが、これは少なくとも 1976 年の時点で地元の古老に昭和初期に存在した「宗家」として記憶されていたもので、その蓋然性は高いと思われるし、今もなお久米崇聖会という伝統を重んじる強固な組織を維持しているかつての住民のことを考えれば、唐栄久米村の時代にも存在していた可能性が高いと推定し得るからである。ただ、第 2 図の梁氏宗家については地筆の変化が不明であるので、ここでは残る 5 軒の面積を対象としたい。

先と同様に第 3 図上で面積を計測すれば、以下ようになる。蔡氏宗家一約 1500m^2 、周氏宗家一約 1500m^2 、王氏宗家一約 1500m^2 、蘭氏宗家一約 900m^2 （ただし隣接する蔡氏宗家と同様に南の道路にまで延びていたとすれば約 $1,800\text{m}^2$ になる）、鄭氏宗家一約 1100m^2 （ただし東の 4 軒が元は同一敷地であったとすれば約 1800m^2 になる）で、蘭氏宗家と鄭氏宗家を隣接する地筆をも含む屋敷地と仮定すれば、「宗家」の屋敷地面積は、 1500m^2 もしくは 1800m^2 のいずれかということになる。もし仮に、唐栄久米村が、ここで取り上げた 5 軒の宗家と同規模の屋敷

で構成されていたとすれば、46軒ないし55軒が立ち並んでいたことになるが、常識的に考えて、宗家から分家した屋敷が、宗家と同規模を有していたとするよりも、宗家よりは小規模な屋敷であったと考えるのが妥当であろう。この点に関しては、本稿で最終的な結論にまで到達することはできないが、いずれにしても宗家の面積が1500m²ないし1800m²という大規模なものであった可能性の高いことに注目したい。

この1500m²ないし1800m²という面積は、琉球の都市部においては、どのような位置づけとなるのであろうか、そのために筆者が先に作製した首里城下町における屋敷地の面積と比較してみよう。言うまでもなく、首里は原則としていわゆる士族屋敷のみで形成されていたが、その内で最も壮大な屋敷は「御殿」であったと考えてよいし、士族の中で高位の「按司」屋敷も大規模であったと思われる。現にこの傾向は、首里城下町復原図を一見しても理解し得る。そこで、復原図の上で、御殿と按司屋敷の面積を計測してみた。この計測もいわゆる方眼法によったが、1:5000の復原作業図の上での計測によったため、久米村の場合よりもその数値はよりいっそう厳密さに欠けると言わざるを得ない。したがって本稿にあげる数値は、あくまでも概要を把握するために示す概数であることを断っておきたい。

まず御殿については、大規模なものから並べると、3800m²、3800m²、3600m²、2300m²、2300m²となる。これらに比べると、さすがに唐栄久米村の宗家屋敷の面積は小規模で、最小の宗家屋敷は最大の御殿の約40%、最大の宗家屋敷は最小の御殿の約80%でしかない。

一方、按司屋敷は、御殿に比べるとその面積は大規模なものから小規模なものまで様々である。大規模なものから順に並べると、6300、5800、5400、5100、4700、4500、4400、3800、3800、3400、3200、2600、2400、2400、2300、2200、2200、2100、1800、1800、1600、1600、1600、1600、1400、1400、1300、1300、1100、1000、900、800m²で、その平均は約2700m²である。したがって、平均値からすれば按司屋敷は、唐栄久米村の宗家屋敷よりははるかに大規模ということになり、御殿の平均面積に比してもさほどの遜色がないとも言える。しかし、むしろ面積を計測した32の按司屋敷のうちで、1800m²以下の例が14例もあることに注目したい。すなわち唐栄久米村の宗家屋敷は、按司の約40%とほぼ同程度もしくはそれよりも大規模な屋敷地を有していたわけである。この点にこそ、琉球王府の唐栄久米村に対する優遇政策を見ることができるのではないか。

5 むすびにかえて……唐栄久米村の景観とその基本理念

沖縄県那覇市の海岸に近い久米は、琉球時代に唐栄（營）久米村と称される地であった。琉球王朝の要望によって中国から渡来してきた人達が、新しい学問や芸術・技術などをもたらし、

琉球で大きな役割を果たし続けたことはよく知られている。この地の存在を除いて、琉球の歴史や文化を語ることはできない。いわば唐栄久米村は、琉球における頭脳でもあった。にもかかわらず、現実の唐栄久米村がどのような景観を有していたのか、またその景観にはどのような意味が潜んでいたのかについては、意外なほどに未解明な点が多い。

そこで、本稿では、変貌著しい現在の久米とその周辺の景観を概観した後に、時代を遡行することによって、琉球時代の唐栄久米村の景観に迫った。具体的には、現行の1:2500都市計画図の上に、昭和初期の久米とその周辺の道路、昭和初期の久米とその周辺の景観、唐栄久米村とその周辺の景観を復原することによって、唐栄久米村の景観が示す意味を検討したわけである。その結果、以上のような点を指摘することができた。

- 筆者による復原図は、琉球時代に描かれた絵画やその後の絵図などと矛盾するものではなく、少なくとも現段階では最も忠実に唐栄久米村の景観を復原したものと言い得る。
- 唐栄久米村は、当時の最新の地理観であった風水思想を重要な基本理念として建設・経営された集落であった。このことは、道路の形態(屈曲、四辻の欠如など)、林による唐栄久米村の囲繞、宗教施設などの立地、地形の傾斜、河川と湛水池の実態などに如実に表現されている。
- また、これらの状況は単なる自然的なものではなく、人工的に意図して生み出されたものであった可能性が高い。したがって、唐栄久米村は、人工的に創出された風水の空間であった。まさに中国から伝来した風水地理観の琉球における発信基地であり、貯蔵庫であり続けたことが理解できる。
- 唐栄久米村の平面形態が円形もしくは楕円形であることも注目すべきである。このことは首里城下町に円形や楕円形の道路網・街区が多く認められという事実とも共通しており、中国の影響や両者の関係などをより詳細に検討する必要がある。
- さらに唐栄久米村の屋敷地の面積を指標に考えれば、首里城下町における按司屋敷に匹敵するほどの面積を有していたことが想定できる。したがって、唐栄久米村に居住した中国からの渡来者は、きわめて優遇されていたことも理解できる。
- 琉球において、都市や村落が林もしくは森林によって囲まれる現象は、亜熱帯の自然条件のしからしむるところと解釈できるが、同時にそれは風水思想によるものでもあった。また、東アジア世界の「土の城壁」、「石の城壁」、「水の城壁」の中で「森林の城壁」と表現し得るとも考えられる。ただし、このことについては、今後、琉球の集落の実態を具体的に検証することによってあらためて考察することとしたい。

[注および参考文献]

- 1) 高橋誠一「首里古地図」と首里城下町の復原, 『東西学術研究所紀要』第33輯, 関西大学東西学術研究所, 2000年3月31日, p. 75-107.
- 2) 高橋誠一「首里城下町の都市計画とその基本理念」, 『東西学術研究所紀要』第34輯, 2001年3月31日, p. 1-39.
- 3) 嘉手納宗徳「那覇市街図(明治初年)「那覇読史地図」について」, 『沖縄歴史地図』所収, 柏書房, 1983年4月20日, p. 134.
- 4) 南出真助「異文化受容空間としての港… 一九世紀の那覇港点描…」, 追手門学院大学アジア文化研究会『他文化を受容するアジア』所収, 和泉書院, 2000年3月30日, p. 165-184.
- 5) 「角川日本名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』, 角川書店, 1986年7月8日.
- 6) 目崎茂和・河名敏男・木庭元晴・渡久地健「地形分類調査」, 『土地分類調査 沖縄本島中南部地域「那覇」・「沖縄南部」・「糸満」・「久高島」5万分の1』, 国土調査: 沖縄県, 1983年, p. 7-14, 及び地形分類図(沖縄中南部).
- 7) もちろん琉球時代の唐栄久米村を偲ばせる史料は数多いし, 第二次世界大戦前の状況を伝えるものはさまざまな形で残されている。例えば, 堂小屋敷については儀間比呂志氏の「堂小屋敷の爺様」の作品, 池宮城積宝の小説「奥間巡査」(1922年の雑誌『解放』の入選小説, 『沖縄文学全集』国書刊行会に所収), あるいは沖縄タイムスの「門中風土記」にも「久米村土族」(1983年9月29日には蔡姓(儀間殿内)など)などがある。したがって唐栄久米村は景観的にはそのほとんどが抹消されているとはいえ, 久米に所縁のある人々にとっては, 意識としては現存するといつてよい。なお, ここで挙げた例は, いずれも儀間比呂志氏から提供いただいたものである。
- 8) 那覇市文化局歴史資料室『那覇市旧跡・歴史的地名地図』(1:6000)のうちの1葉, 1998年3月。
- 9) 那覇市1:2500都市計画図XV-JE 14-2(昭和60年3月作成, 平成5年8月撮影空中写真, 平成7年8月現地調査, 平成7年12月修正), XV-JE 24-1(昭和60年作成, 平成5年8月撮影空中写真, 平成7年8月現地調査, 平成7年12月修正)。
- 10) 久米以外の図のタイトル及び作成者等は以下の通りである。「戦前(昭和6年頃)の泉崎・湧田民俗地図」(古波鮫唯廉氏と崎間麗進氏の資料をもとに高里政彦氏作成, 1989年7月1日), 「辻遊郭之図」(終戦直前, 那覇警察署が遊郭取締りのために作成したのもとに西平守模氏と具志堅以德氏が記入, 1975年12月11日), 「戦前の上之蔵民俗地図」(1976年4月24日崎浜秀雄氏記入, 1976年5月嶋袋全峯氏記入), 「戦前(大正10年頃)の久茂地村民俗地図」(池宮城永錫氏作成, 1975年10月6日), 「戦前(昭和3年頃)東町民俗地図」(仲宗根宗温氏, 1975年11月, 山田有邦氏昭和15年頃, 1976年3月4日, 東町に関しては他に1枚の地番図があつてそれにも居住者名などが記載されているが1975年11月受という注記があることから, この東町民俗地図の原図であつた可能性が高い), 「戦前(想定昭和10~15年頃)の大門前民俗地図」(松村興勝氏作成, 作成日の記載なし)。これらは那覇市歴史資料室の田名真之氏から提供いただいた。
- 11) 嘉手納宗徳「那覇市街図(明治初年)」, および「那覇市街図(明治初年)「那覇読史地図」について」, 『沖縄歴史地図』所収, 柏書房, 1983年4月20日, p. 66・67, p. 134.
- 12) 田名真之「近世久米村の成立と展開」, 『新琉球史—近世編(上)』所収, 琉球新報社, 1989年9月25日, p. 205-230.
- 13) 東京国立博物館『海上の道—沖縄の歴史と文化—』, 読売新聞社, 1992年1月7日, p. 1-163. 青柳光郎「名画日本史 琉球八景」, 朝日新聞日曜版, 2000年2月20日, p. 1・3.
- 14) [明] 胡靖「琉球記—附中山詩集」(萬曆刻本), 黄潤華・薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編(上)』所

- 取, 北京圖書館出版社, 2000年10月, p. 235-304。関西大学文学部の松浦章教授から教示と提供をいただいた。
- 15) [明] 夏子陽・王士禎編「會稽夏氏宗譜・使琉球録」(明夏氏活字本), 黄潤華・薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編(上)』所収, 北京圖書館出版社, 2000年10月, p. 305-640。関西大学文学部の松浦章教授から教示と提供をいただいた。
 - 16) 同図は, 田名真之「近世久米村の成立と展開」, 南出真助「異文化受容空間としての港」にも収録されているが, 本稿では社団法人久米崇聖会事務局長の上原和信氏から提供いただいた図を使用した。
 - 17) 町田宗博・都築晶子「『風水の村』序論—『北木山風水記』について—」, 『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』第36号, 1993年3月, p. 99-213。なおこの文献については, 福島清氏に教示と提供をいただいた。
 - 18) 島尻勝太郎「沖縄の風水思想」, 窪 徳忠編『沖縄の風水』所収, 平河出版社, 1990年9月25日, p. 3-13。
 - 19) 都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」, 窪 徳忠編『沖縄の風水』所収, 平河出版社, 1990年9月25日, p. 191-232。
 - 20) 先に挙げた町田・都築氏の論文にも一部述べられているが, 八重山の村落にはこのような具体例が多く認められる。なお, この問題については, 後日検討する予定である。
 - 21) 高橋誠一『日本古代都市研究』, 古今書院, 1994年10月16日, p. 1-398。
 - 22) 面積の計測に際しては, 方眼法を採用した。基図が1:2500であるから, かなりの誤差はあるものと思われる。本稿では, 100m²未満は四捨五入した数値を使用しているが, これらの数値が決定的な意味を持つものではないことは言うまでもない。
 - 23) 具志堅以德・国吉有慶『久米村の民俗』, 社団法人久米崇聖会, 1989年5月, p. 1-89。
 - 24) 田名真之「古琉球の久米村」, 『新琉球史—古琉球編—』所収, 琉球新報社, 1991年9月1日, p. 223-257。
 - 25) 田名真之「近世久米村の成立と展開」, 『新琉球史—近世編(上)』所収, 琉球新報社, 1989年9月25日, p. 205-230。
 - 26) 坂本磐雄『沖縄の集落景観』, 九州大学出版会, 1989年4月20日, p. 1-358。
 - 27) 前掲, 具志堅以德・国吉有慶『久米村の民俗』, 社団法人久米崇聖会, 1989年5月, p. 1-89。

【附記】

注に記した順に挙げれば, 絵本作家・版画家の儀間比呂志氏, 那覇市歴史資料室の田名真之氏, 関西大学文学部の松浦章教授, 社団法人久米崇聖会の上原和信氏, 株式会社「国建」の福島清氏などから, 貴重な資料の提供・教示と励ましの言葉をいただいた。琉球・沖縄の心を表現し続けておられる儀間比呂志氏は唐栄久米村にルーツを持たれると聞かすが, まさに唐栄久米村の伝統は現在もなお生き続けているのである。記して, 深甚なる感謝の意を表したい。

The Landscape and The Structure of Chinese Village *Kume* in *Ryukyu* Dynasty

Seiichi Takahashi

Chinese Village *Kume* near the seashore of *Naha* City in *Okinawa* Prefecture was built by people who came from China upon request of *Ryukyu* Dynasty. It is well known that new leanings, arts and technology were introduced into *Ryukyu* through this village. So the village was a brain in *Ryukyu*, and we cannot discuss the history and culture of *Ryukyu* without the existence of *Kume*. Nevertheless, not much is investigated about the landscape of the actual village and the facts hidden in the landscape.

In this paper, we have the overview of the landscape of the current *Kume* and its surrounding area which is rapidly changing, and by going back to the past, we reproduce the *Kume* Village in *Ryukyu* Era. More specifically, by reconstructing *Kume* and its surrounding roads in early *Showa* Era, *Kume* and its surrounding landscape in early *Showa* Era, and that in *Ryukyu* Era on the city planning map of the scale of 1:2500, we investigated the meaning of the landscape. The findings are as follows.

- The map reconstructed by the author does not contradict the drawings in *Ryukyu* Era and later. At least at this point, it is the most accurate reconstruction of the landscape of *Kume* Village in those days.
- This village was constructed and managed based on the traditional *Fusui* principle of China, the latest geographic thought of those days. This is clearly shown in the shapes of roads (bending, lack of intersections, etc), the enclosures of the village by groves, locations of religious facilities, inclination of topography, the conditions of the rivers and reservoirs.
- It is highly possible that those were not made naturally, but created artificially with some intention. So *Kume* Village can be called a *Fusui* space created artificially. *Kume* Village continued to be the base and storage in *Okinawa* of the geographical thought of *Fusui* introduced from China.
- It should be noted that the plane shape of *Kume* Village was round or elliptic. It is a

common feature with the round or elliptic road networks and town form frequently seen in the castle town of *Shuri*. It is necessary to investigate the influence of China and the relations between the two in more details.

- Taking the area of housing sites in *Kume* Village as an index, it is assumed that they had the area equivalent to that of *Aji* (the upper class warrior) residences in the castle town of *Shuri*. So we understand the people who came from China were given very favorable treatments.
- In *Ryukyu*, towns and villages were surrounded by groves or forests and it could be interpreted as natural conditions in subtropical climate. But at the same time it was based on the traditional *Fusui* Principle of China. In comparison with the 'walls of clay', 'walls of stones', 'walls of water' in East Asia, it could be called the 'walls of forests'.